

## 中国における教育のあり方について

伊藤はるか

### 1. はじめに

前回のレポートでは、大学の定員増加からくる就職問題について取り上げた。その中では中国社会が「大卒」をエリートとして一律には見なさなくなった傾向が浮き彫りとなり、大変印象深かった。しかし、これは以前から続いていたことではない。そこで、中国における教育、特に高等教育のあり方はどのように変化していったのだろうか。また、それらの要因は何だろうかという疑問が挙がった。

教育観の変化は日本でも見られたことだ。しかし、経済面や社会的背景の異なる中国においても同様の流れであるとは断定できない。本ペーパーでは、中国における教育のあり方、その変化と要因について紹介していきたい。

### 2. なぜ教育が必要なのか～開放前の識字率から

ところで、なぜ教育を普及させる必要があったのかというところに戻り、教育での基礎中の基礎である読み書き、すなわち識字率に焦点を絞って説明しよう。

統計によると、1949年の中国の非識字者は総人口の80%以上を占め、農村部では更に値が高かった。後に政府は各地域で識字運動を大々的に展開していくが、大きな理由は「この状態ではどうやって国家を建設したらよいか。」という先行きの見えない国家の将来性であった。50年近い努力の末、現在は青壮年の非識字率が4%以下になった。喜ばしいことに、政府の識字運動によって字を覚えた多くの人々がその後、実用的な技術の育成訓練を受け、労働力の質と自ら豊かになる力を高めたのである。(丘 2009 P45)

このように日常的に文字を多用する現代で生活する以上読み書きは必然的に求められる。中国のように現状から、国家の更なる発展を望むならば尚更だ。

### 3. 基礎教育の普及、義務化

新中国の成立後、すべてを復興しなければならないため、どの分野でも人材の育成が急務となった。そこで政府は短期の幹部学校や技術学校を開設し、速成の人材養成を図る以外に小学校や初級中学校を開設し、基礎教育を着実に発展させた。

以後、中国は一貫して基礎教育を重視してきた。1986年から中国は小学校と初級中学校段階での9年制の義務教育を実施し始め、立法の面や教員資格を持つ人の養成、教育の視察・監督などの面から義務教育を推進した。(丘 2009 P47) 読み書きという土台が定着した上で、やっと基礎教育の普及を図ることができたのだ。

しかし、この段階での義務教育には問題点があった。中国語の「義務」には「無料」という意味もあるが、その当時はまだ教育費の無料化は実施されていなかった。(丘 2009 P47)

のちに政府は「人材の養成から教育立国の大計、教育の機会均等、社会的公正」を考慮して、2006年、まずは中西地区の農村で、小学校と初級中学校の学費と雑費を免除した。更に2008年秋までに全国の農村部の1億5千万人の小学校と初級中学校の学費と雑費・教科書無料が実現し、1100万人以上の児童生徒が寄宿舎での生活費補助を受けられるようになった。同時に都市部の2821万人の小学生初級中学生の学費と雑費が免除された。これによって全国民の義務教育が真の意味で実現したのである。(丘 2009 P47)

#### 4. 高等教育の普及

欧米と比べると、中国の高等教育は始まるのが非常に遅かった。新中国成立後、高騰教育の発展に大きな力を入れると同時に国の需要に基づいて、総合大学と単科大学の学部と専攻を再編成した。しかし、1966年から76年までの「文化大革命」の中で学校教育の秩序が混乱し、全国大学の統一入学試験は中断された（丘垣 2009 P47）。

文化大革命による混乱を経て、1999年には大学の新生募集定員は大幅に増加した。これは、21世紀の中国の経済・社会が発展する上で必要とされる人材の需要に応えるためであった（丘垣 2009 P47）。現在、中国の大学教育はエリート育成の段階から大衆化の段階へ突入した。中国は人口大国から人材資源国になったのだ。

#### 5. おわりに

中国はかつて、近代であるにもかかわらず教育普及はままならない状態だった。その原因は教育の基礎である読み書き自体が定着していないことにあった。ここ50数年の短期間の中で、政府は識字運動によって地道に識字率を上げていくことに成功した。

この土台が完成した上で、次は基礎教育の普及に力を入れた。当初は無料化されず制度として形式上だけであった義務教育は次第に実質的なものへと変化をしていった。

また、高等教育に関しては先進国と比較するとかなり遅れての普及であった。しかし現在は高等教育も大衆化しつつあり、また、社会・経済の発展するうえで単なる教育ではなく人材養成の場としての需要も出てきたのである。

基礎教育に関してかなりの遅れを取っていた中国だったが、わずか50年余りで世界的に多分野の発展が注目される国へと成長した。

今回、国が成長する上では、できて当たり前とされるレベルの教育が非常に重要な要素であると改めて感じた。そこをしっかりと固めた中国は、もはや人材大国へと変化しているといえるだろう。また、ここから更なる人材大国へと大きく成長するためには教育の分野や形態も多様であることが求められる。今後の中国で教育がどのような変化を見せていくのか、教育形態を始め、教育について多方面から学んでいる者としては非常に興味深い。

#### <参考文献リスト>

丘垣興(2009) 「文字を教えるから人材大国へ」『人民中国 5』 人民中国雑誌社